第4話　カニバリズムの起源と精神分析

下川昭夫・鵜澤和宏
臨床心理学研究室　人間動態論研究室

最近、発達心理学や精神分析学の理論を援用して、ヒトの心の進化を探るこころみが行われるようになってきた。この分野を進化心理学という。心理学と人類学を専門にする筆者らは、この未開の分野に切り込み、人類・考古学的証拠を精神分析の手法で検討することによって、先史人類の心の探索を試みた。今回テーマとして取り上げたのはカニバリズム（食人行動）である。

現代社会においてヒトがヒトを食う行為はタブー視されているが、歴史的には世界各地の社会・集団で、様々な動機のもとに食人が行われてきた。最近の考古学の成果によればその起源は約80万年前にまでさかのぼることも明らかになっている。禁忌しながら連綿と行われてきた食人行動の背景に、人の生活環境の変化とともに認知能力の進化が関係しているのではないかというのが筆者らの視点である。

カニバリズムの動機に関して、心理学では他者と自己との同一化をはかるためだとする解釈がある。恐れや敬愛の対象となる人物を食べることで、自己との同一化をはかるという考えだ。食料の枯渇による不可避的食人とは一線を画するものだが、この種の食人を行うには抽象的な概念を駆使する認知能力の発達が前提されなければならない。逆にいえば、化石人類の認知能力を探るうえで、心理的要求に基づく食人の有無はひとつのメルクマールとなるわけである。そこで不可避的食人と自己同一化と関係する心理的欲求にもとづく食人を識別する基準を設定し、人類の各進化段階において検出される食人行動がいずれの原因によって引き起こされたものかを検討した。

その結果、ネアンデルタール人に代表される古代型サピエンスと現代型サピエンスとの間に、大きな変化が生じている可能性が示された。言語を基盤とする抽象的な思考と密接に結びついた現在の我々の心は、現代型サピエンスが出現した約10万年前以降に形成された、比較的歴史の浅いものである可能性が示唆される。